

包装紙一新「東雲の穂」の歩み



篠山東雲高が酒米 5年目

丹波篠山市の鳳鳴酒造は日本酒「田舎酒純米 東雲の穂」の販売を始めた。市内の県立篠山東雲高の生徒らが作った米を使い、5年目となる今年は包装紙を一新した。

同校のアグリプロダクト類型の生徒らが約1・4畝の田んぼで栽培した酒米「五百万石」が原材料の一部として使われている。丹波杜氏による日本酒造りが盛んな地域に学校が立地することを生かし、生産から加工、販売までを体験的に学ぼうと2018年から始めた。生徒は、田植えや

草刈りといった一連の米作りの作業だけでなく、利き酒師や大学の研究者ら専門家から日本酒について講義を受け、酒蔵を見学するなどした。

包装紙は牛や枝豆、トマトなどをイラストにして、同校での取り組みを表現した。裏には「東雲の穂」を作ってきた5年間の歩みを写真とともにあしらった。

3年生の さんは「夏の草刈りなど大変な作業を経て出来たお酒なので感慨深い。私たちの活動を一人でも多くの人に知ってほしい」と話す。

高校との連携を担当する鳳鳴酒造の 営業課長(右)は「地域の学校とご縁を大切にしたいと思いつながら続けています」と語る。

店頭価格は4合瓶1520円、一升瓶2340円。同社のオンラインショップや直売店などで買える。

篠山東雲高での酒米作りの中心メンバーで(左から)3年生の さん、 さん、 さん。今年は包装紙(両脇)も一新した。丹波篠山市呉服町の鳳鳴酒造

2022年12月20日

朝日新聞